

ACT!

支援者さまと国境なき医師団(MSF)をつなぐニュースレター

2025年8月号

日本と世界をつなぐ医師が思うこと

支えて、支えられて ともに未来へ

© Malak Shaher/MSF



Interview 1

せきさと し
関聡志 (外科医)

外科から整形外科まで
横断的に腕を磨く関。
東京都内の災害医療センターに
勤務し、救命救急を担う。

イエメンの病院で、脚を骨
折した子どものエコー検査
をする関。致命的な腹部の
出血がないかどうか全身状
態を確認する。一番のモチ
ベーションは患者さんや現
地スタッフからの「ありがと
う」の言葉だという。



Interview 2

いわもと もも こ
岩本桃子 (総合診療医※)

病気の発生や要因を研究する
疫学専門家から
総合診療医に転身。高知県の
へき地医療にも取り組む。

バングラデシュにあるロヒ
ンギャ難民キャンプの病院
で、帰国前に撮った一枚。
キャンプ内で最も重い内科
疾患の患者さんを受け入れ
るため、現地の医師ととも
に一丸となってチーム医療
に取り組んだ。

緊 急援助の現場で活動する MSF のスタッフの多くは、帰国後に「活動地でたくさんの
ことを学んだ」「得られた知識や技術を日本でも生かしたい」と口にします。

日本から派遣されるスタッフの約3分の1は医師。では、彼らはどんな思いを抱いているのでしょうか。
私たちにとって身近な病院やクリニックなどの医療現場でも、学びが生かされているのでしょうか。
日本と世界、それぞれの医療現場が与え、また受け取っているものとは――

2人の医師に話を聞きました。

※ 特定の病気や治療法に限定せず、患者さん一人ひとりの心身の状態や社会的な背景、複数の医学的な課題などを考慮して全人的に診療する医師。

Interview **1**



© Shin Yahiro

“できることをコツコツ積み上げて、より質の高い医療を、”

関聡志 (外科医)

PROFILE

- 神奈川県出身。専門の消化器外科や救急医療に加え、産婦人科や整形外科でも研さんを積む。
- 2016年～ MSFに初参加。南スーダンやイエメンなどで9回活動し、MSFの外科研修にも参加。
- 2024年1月 能登半島地震で医療支援。

自分に足りないものが見えてくる

国境なき医師団 (MSF) への参加は医学部時代からの目標でした。念願かなって、最初に派遣されたのが内戦中の南スーダンです。全身麻酔器や人工呼吸器はおろか、CTもレントゲンもない。本当に何もない中、たった一人の外科医として全部自分がやらなくてはいけない環境でした。自分の経験のなさに、日々打ちひしがれました。MSFの現場には、あらゆる外科系疾患の患者さんがやって来ます。脳外科から産婦人科まで、たとえ専門外でも診るほかない。日本の病院にいる間も、専門性を磨く傍ら産婦人科や整形外科の研修を受けたり、MSFの外科医向け研修に参加したり、横断的に知識や技術を増やす努力は欠かせません。それでも、現場に戻れば「あれもできたら、これもできたら」と思うことばかり。いまだにその繰り返しです。

日本で鍛えられた基礎が役立つ

イエメンでの活動中、腹部のけがで運ばれてきた患者さんの出血源が見つけれず、ついに心臓が止まってしまったことがありました。その時、救急医療の基本に立



© Michiko Furutani

日本で生かす
活動地の学び

紛争地の症例を
国内の医療従事者に共有
日本の「万一」に備える

銃弾は、一直線ではなく複雑な動きをしながら体の中を通り抜け、思いもよらぬ箇所を傷つける——MSFで出合った症例を通じて学んだ実践的な知識や治療方法は、日本外傷学会や日本災害医学会、日本救急医学会などさまざまな学会や論文で報告し、日本の医療界に共有する。

んの治療を通じて得た知識や技術は、日本の医療界にとって貴重な参考事例なんです。日本でも世界でも、現場で求められることをこれからも一つ一つやっていく。そして、できることをもっと増やしたい。それが世界のどこでも質の高い医療を提供することにつながると信じています。

Interview **2**



© MSF

“「病気を診る」ではなく「人を診て、その健康を守る」医療を、”

岩本桃子 (総合診療医)

PROFILE

- 東京とハワイ出身。現在、産婦人科専門医と総合診療専門医／プライマリケア専門医、2つの専門医資格取得を目指す。
- 2016年～ MSFに初参加。カンボジアやマラウイ、バングラデシュで4回活動。
- 日本災害派遣医療チーム(DMAT)登録。

もっと患者さんの近くに

私の専門は、もともと日本のがん対策を支える調査やデータ分析でした。でも、数字ばかりを追う、あまりにも患者さんから遠い日々には違和感が募り、MSFに飛び込みました。最初は疫学専門家としてカンボジアに赴き、診療現場と行き来しながらC型肝炎の診療プログラム開発に取り組みました。MSFの現場で、病気によって人生が180度変わってしまった患者さんたちと接するうちに、臨床に戻る決意が固まっていきました。患者さんを知れば知るほど、どんな症状で、何に困っているのか詳

しくなる。その人のしんどさを軽くするため、もっと病気を治したくなるんです。

MSFでは与えるより得る方が多い

胆石や貧血で命を落とす。人工透析を受けられず、20代の若さで亡くなる。MSFの現場にはこうした患者さんがざらにいて、良性疾病が進行した時の恐ろしさや予防の大切さを命に代えて教えてくれます。たとえば、未治療の先天性心疾患があると、どんな心臓音がして、エコーにどう映るか。知っていれば、日本でも心疾患の診断や評価に役立ちます。患者さんには教えられて、頑張る気力をもらってばかり。MSFでは、与えるものより得るものの方がはるかに多いんですよ。

へき地医療も、MSFの活動も同じ

臨床に戻り、内科の疾患を幅広く診る総合診療医になってから高

知県のへき地医療に関わり始めました。総合病院の外来や救急で働きながら、校医を務めたり、病院まで車で片道1時間近くかかる山奥の救急現場へ緊急車両で駆け付けたり。都市部を除けば、医師や病院、特に産婦人科は圧倒的に足りていませんでした。孤立集落への訪問診療では、内科でも緩和ケアでも自分一人で診るしかありません。「へき地医療も、MSFの活動も同じだ」と実感しました。

実は、今年の春から産婦人科の専門研修を受けています。総合診療医が産婦人科も診られるようになれば、きっと高知県でもMSFでもすぐく役に立てるから。これからも、医療資源*の少ない場所で、「病気を診る」のではなく「人を診て、その健康を守る」医療を追求していきたいです。

* 医療を提供するために必要な「人」と「財源」、医療施設や医療機器、医薬品などの「物」、診療録や検査データなどの「情報」を指す。



© Michiko Furutani

日本で生かす
活動地の学び

へき地医療の現場で
地域の若者に寄り添い
心身の悩みに耳を傾ける

「だるい」と訴える不登校の子どもや、望まない妊娠に悩む若い女性などに会い、「自分は地域のことを何もわかっていないと気付いた」と岩本。若者の受け皿となるべく、高知県では学校の養護教諭と協力したり、思春期の子どもの診療やサポートに関わったり、試行錯誤を続ける。

活動地はいま

日本ではあまり報道されない国や地域でも危機が続いています。今回は、紛争が長引いているスーダンと、年初に紛争が激化したコンゴ民主共和国の状況、そして国境なき医師団(MSF)の活動をご報告します。



チャドに避難してきた親子。
11歳の少女はMSFの診療所でマラリアと診断された。

スーダン●世界最大の避難民危機で危ぶまれる命

—感染症や栄養失調の治療で子どもたちの命を守る—

2023年から続く激しい戦闘で、スーダンのほぼ4分の1の人口に当たる約1200万人※が故郷を追われました。多くの人びとが避難民キャンプで過酷な生活を送り、はしかやデング熱などの感

染症や飢きに苦しんでいます。MSFは2年間で、32万件以上の救急外来に対応し、6万7000人以上の子どもの栄養失調を治療。国内や避難先の近隣国・地域で緊急対応を継続しています。

※国連難民高等弁務官事務所(2025年6月)

コンゴ民主共和国●キャンプから退避する人びとに緊急対応

—必要な医療を移動診療で届ける—

長く続く情勢不安で医療体制がぜい弱なコンゴ。2025年1月に東部で紛争が激化し、武装勢力「3月23日運動(M23)/コンゴ川同盟(AFC)」が主要都市ゴマを制圧しました。避難民キャン

プからの退避要求を受け、数十万の人びとが水も食料もない中、急な移動を強いられました。MSFは移動診療を実施し、帰郷者や移動中の人びとの栄養失調や感染症の治療を行っています。

スーダンの
特集ページは
こちら→



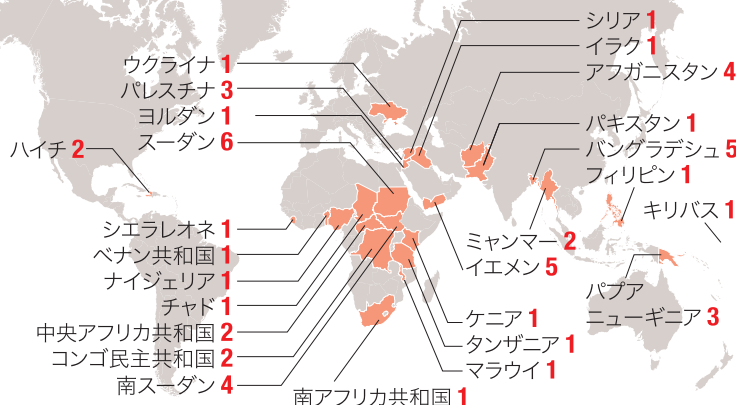
移動診療で子どもの栄養状態を確認する
MSFのスタッフ。

今号の感想を 教えてください

日本と世界をつなぐ医師を特集した今号の内容
はいかがでしたか？ ぜひアンケートで皆さま
の感想を聞かせてください。
締め切りは2025年9月30日(火)中です。



日本からのスタッフ派遣状況 26の国と地域53人(2025年6月3日現在)



MSF連絡帳

「相続財産からの寄付」についてまとめた パンフレットができました

亡くなった方から相続した財産の一部をMSFに寄付する「相続財産からの寄付」へのお問い合わせが増えています。相続税の申告期限内に必要な手続きや注意点、Q&Aなどをまとめたパンフレットを、ご希望の方に無料でお送りしますので、公式サイトからご請求ください。

ご希望の方は
こちらから→



© Ayano Kinoshita



ニュース
レター **ACT!** 2025年
8月号

発行元 特定非営利活動法人 国境なき医師団日本
〒162-0045 東京都新宿区馬場下町 1-1 FORECAST早稲田FIRST3 階

寄付・ご登録情報に関するお問い合わせ

TEL **0120-999-199** 通話料無料

平日 9:00~18:00 / 土日祝日、年末年始休業

※ご住所など、ご登録の情報についての変更や、「毎月の寄付」の変更は
上記までご連絡いただくか、マイページでお手続きください。

※2025年6月の情報を基にしています。
最新の情報は国境なき医師団ウェブサイトをご覧ください。



マイページは
こちらから

遺贈に関するご相談・お問い合わせ

TEL **03-5286-6430** 担当者直通

平日 10:00~17:00 / 担当：荻野、今尾、小芝

国境なき医師団ウェブサイト www.msf.or.jp

